旺文社編　大学情報公開 BOOK　『大学の真の実力』

大学データをマクロ分析！

私立大学

推薦入学者の 51.5%が指定校から、17.5%が付属校から！
現役入学者は全体の 87.4%！
1 年以内退学率 1.9%、修業年限以内退学率 9.2%！
大学卒業後に大学院進学 6.4%、就職 72.1%！

旺文社　教育情報センター　平成 25 年９月

大学の教育情報公開に基づき、旺文社では今年も『大学の真の実力 情報公開 BOOK』を刊行する。今年で3回目の刊行となる本誌には、さまざまな大学データを掲載しているが、その中から大学の“今”が垣間見えるテーマをピックアップし、分析した。本誌掲載のデータとあわせて活用してほしい。　※データは 2013 年8月 14 日現在集計分を基に算出した速報値。

●各大学の詳細データは『大学の真の実力　情報公開 BOOK』を参照。

１．入試関連情報の公表率

【私立大学で入試方式別の入学者数を７割超が公表！】

	国公立大学	私立大学
志願者数	100.0%	96.5%
合格者数	100.0%	95.8%
入学者数	100.0%	94.2%
入試方式別の入学者数	100.0%	74.5%

※国公立大学 163 校、私立大学 573 校の回答を基に算出。
私立大学の公表校数は、志願者数 553 校、合格者数 549 校、入学者数 540 校、入試方式別の入学者数 427 校。

入試関連情報は、受験生が出願校決定に際して重要とするデータのひとつだ。とりわけ志願者数と合格者数は、入試対策において最重要データといっても過言ではない。

入学者数は、大学の入学定員割れが社会的関心事となる中、大学経営の面でも、教育の質の保証を担保する意味でも、大学関係者にとっては、極めて大きな意味を持つ数値だ。

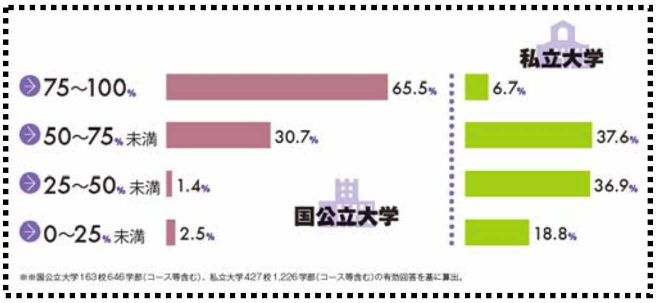
国公立大学では志願者数、合格者数、入学者数のいずれについても、全て公表されており、今回の調査でも昨年に引き続き、全ての項目について回答を得られた。一方、私立大学は、数値を見てわかる通り、志願者数・合格者数・入学者数の順に公表率が下がる結果となった。

入試方式別の入学者数は、私立大学で「一般とAOの合計」「AOと推薦の合計」といった回答が少なくなく、明細不明であるため、公表率74.5%に留まるという結果となった。とはいえ、昨年の同調査では公表率71.6%であったことを踏まえると、教育情報の公表に向けた積極性の高まりを見てとることができる。

©2013 旺文社 教育情報センター

２．［学部別］一般入学者の占有率の分布

【国公立大学は一般入試で入学がメイン。私立大学は２極化が継続。】



文部科学省資料によると、一般入試を経て大学に入学した者は国公立大学81.6%、私立大学49.1%だ（2012 年度入学者）。ただし、この値は、全体の数値であるため、ここでは詳細なデータとして学部別の集計データを示したい。

入学者の総数に占める、一般入試での入学者の割合を算出し、それを学部ごとに占有率ゾーン別に区分して集計したのが、グラフに示した数値だ。

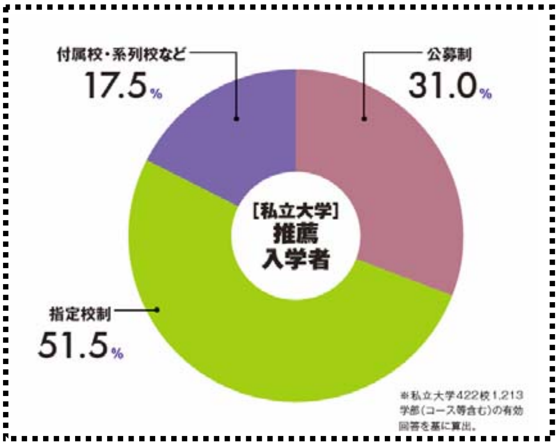
たとえば、国公立大学の全学部のうち、65.5%の学部では、４人のうち３人以上（=75%以上）が、一般入試入学者ということだ。つまり、国公立大学全体では、96.2%の学部で、一般入試での入学者が、その学部への入学者の過半数を超えていると読み取ることができる。ちなみに、国公立大学で占有率50%未満の学部は、夜間主コースなどだ。

私立大学はさまざまで、一般入試での入学者が90%以上の大学・学部がある一方、25%未満も少なくない。「一般入試で半数以上の入学者を確保」と「他の入試も含めて入学者を確保」に２分されている。

なお、これらの傾向は、国公私立大学ともに昨年と同様だ。

３．［私立大学］推薦入学者の内訳

【推薦入学者のうち、指定校・付属校からが全体の約７割を占める！】



推薦入試には、「公募制」「指定校制」「付属校・系列校推薦」の大きく３つのパターンがある。文部科学省資料によると、私立大学の推薦入試での入学者数は例年、約19万人いる。しかしながら、そのうち公募制が何人、指定校制が何人といった内訳は公には発表されていない。

今回の調査で、推薦入試の内訳を全て公表した私立大学は422校1,213学部で、全体のおよそ７割をカバーしている。グラフに示した通り、指定校制が過半数を占め、次いで公募制で約３割、残りが付属校・系列校という結果は、昨年の同調査と同傾向だ。

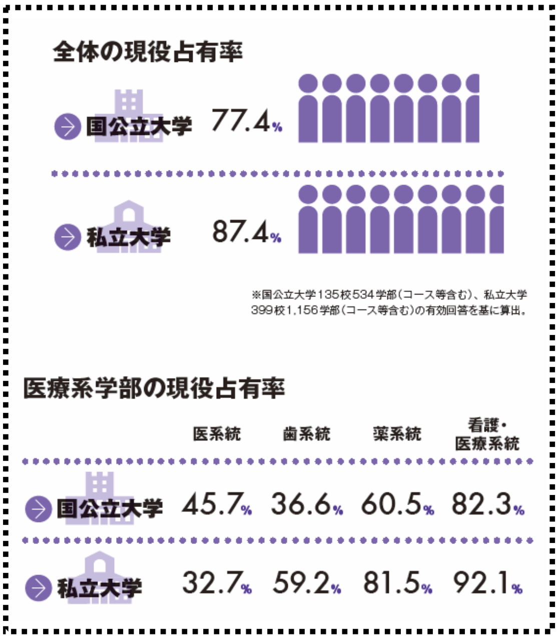
ここ数年の大学入試のトレンドとして、「より早く」「確実に」合格を決めたい受験生とその保護者の安全志向がある。それは、大学も同様で、入学定員割れが社会的関心事となっている中、「早く」「確実に」「優秀な」入学者を確保したいという考えは間違いなくある。

指定校制推薦は、受験生サイドと大学サイドの考え方が、マッチングした入試方式のひとつと言えよう。

©2013 旺文社 教育情報センター

４．入学者の現役占有率

【浪人生は極めて少数派！ ４人に３人以上が現役入学生！】



大学受験生の現役志向、安全志向が長期的トレンドとなっている。家計への負担を考えて浪人はしない、無理せず現役で合格できる大学を狙う、といったマインドだ。

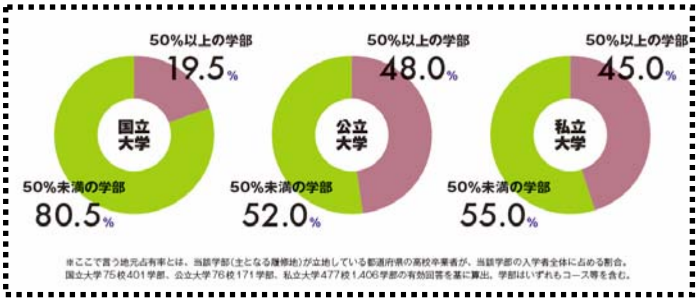
一方、今からおよそ20年前の1992年（大学受験生数のピーク年）に比べて、大学受験生数は約30％減っており、逆に学部入学定員は約20％増えている。数字の上では、大学は間違いなく“ 入りやすく”なっている。

受験生のマインドと、大学入学を取り巻く環境変化によって、入学者に占める現役生の割合が高まるのは自明のことと言えよう。

調査によって判明した、全体の現役占有率は表に示した通りで、いまや浪人生は極めて少数派だ。しかし一方で、医療系学部のデータを見ると、医・歯系統の現役占有率は、平均を大きく下回り、入試での競争が厳しいことを物語っている。

５．［学部別］入学者の地元占有率の分布

【公私立大学とは対照的なデータ差異。国立大学は地元生が少ない!?】



関東の大学のローカル化といった表現を見聞きするほど、受験生の地元志向は、ここ数年続くトレンドだ。グラフでは、有効回答があった学部を、地元占有率50％以上＆未満に分類して集計し、全体に占める割合を示した。

公立大学と私立大学では、地元占有率50％以上の学部が半数近くある。とりわけ公立大学の場合は、地元出身者は他県出身者より入学金が低く設定されている場合が多く、これが地元占有率を高めていると考えられる。

一方、国立大学は総じて地元占有率が低い。文系の学部、教員養成系と看護・医療系の学部に、地元占有率が高いところも見受けられるものの、難関国立大学、医学部医学科、理・工・農学系学部は全国から学生が集まってくることが、全体数値を押し下げている要因のひとつと言えよう。

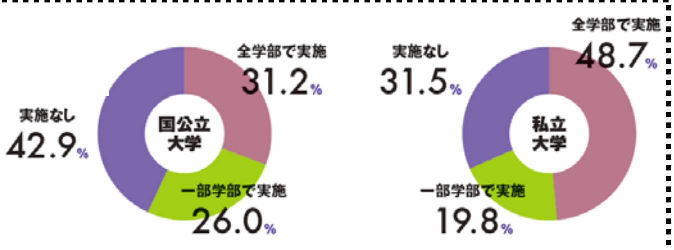
系統別では、理・工・農学系統と医・歯・薬系統が圧倒的に地元占有率が低い。逆に、看護・医療系統は高く、地元生が過半数を超える学部が国立でも36.6％あり、公立では83.7％、私立60.4％にのぼる。

これらは、いずれも、昨年の同調査と同様の傾向を示している。

©2013 旺文社 教育情報センター

６．高校課程の補習サポート実施率

【国公立大学で約３割、私立大学で半数近くの大学が高校課程の補習サポートを実施！】



※国公立大学154校、私立大学515校の有効回答を基に算出。

国公立、私立ともに、全学部で実施と一部学部で実施を合計すると、過半数を超える大学で、何らかの高校課程の補習サポートを実施していることが、今回の調査で判明した。内容としては、理系学部で、推薦入試やAO入試での合格者が対象というコメントが目につく。

一般入試、推薦入試、AO 入試では、それぞれ受験生が求められている能力が異なる場合が少なくない。おおざっぱに言えば、一般入試は学力がメインとなり、推薦・AO 入試は高校での学習成績や活動実績、学科への適性、アドミッション・ポリシーへの合致などとなる。

もちろん、大学・学部によってさまざまな実施実態のある推薦入試、AO入試を、一概に“学力不問”の試験と言い切ることはできない。しかし、一般入試入学者との比較において、学力把握が課題となっているのは事実だ（そのため、センター試験や検定試験の利活用などが促されている）。

大学での学びの基礎は、高校課程のマスターにある。学力的背景の異なる新入生の中に、学力が不足していると思われる者がいる以上、高校課程の補習サポートを実施する大学があることは、当然と言えよう。

７．退学率の公表方法

【退学率はホームページでの公表と個別照会がメイン！】

	大学ホームページ	オープンキャンパスなどでの配付資料	その他	学外公表なし
国公立大学	14.7%	1.4%	28.5%	55.3%
私立大学	38.0%	0.7%	28.9%	32.4%

※国公立大学151大学625学部(コース等含む)、私立大学460校1,380学部(コース等含む)の有効回答(複数回答可)を基に算出。

ひと口に退学といってもさまざまある。積極的な学問志向の変更による退学、仮面浪人を経て他大学入学に伴う退学、経済的な事情によって退学をせざるを得ないケース、入学した学部・学科とのアン・マッチングによる退学、単位認定の厳格化による退学など、ポジティブ・ネガティブ両面がある。

大学を評価する指標のひとつとして退学率を挙げることに異論はないが、退学という事象の背景にある個別事情は学生一人ひとりで異なることには、十分留意してデータを見る必要があるだろう。

本誌では、退学率に関しては、このような事情もあり、また、極めて一人歩きしやすいデータであることを踏まえて、大学ごとの個別データの掲載はしていない。

今回、初めて調査した退学率の公表方法の集計を表に示した。入試関連情報では100%の公表率を誇った国公立大学ではあるが、こと退学率に関しては私立大学のほうが、公表に積極的という結果が出た。

なお、退学率を大学案内で公表しているとの回答はゼロだった。「その他」では、個別に照会されれば回答するというコメントが大多数だった。

©2013 旺文社 教育情報センター

８．［系統別］退学率＆修業年限卒業率

【数値として退学率は存在するものの、最頻値は０％！】

	1年以内退学率	修業年限以内退学率	修業年限卒業率
国公立大学	0.4%	2.9%	85.0%
私立大学	1.9%	9.2%	80.2%

	1年以内退学率		修業年限以内退学率		修業年限卒業率	
系統	国公立大学	私立大学	国公立大学	私立大学	国公立大学	私立大学
法・経済・社会	0.5%	2.1%	2.6%	10.3%	83.1%	78.8%
文・教育・教養・国際	0.4%	1.9%	2.6%	8.4%	84.8%	81.9%
理・工・農	0.7%	2.1%	4.0%	10.7%	82.6%	76.0%
医	0.0%	0.0%	1.1%	2.0%	87.5%	86.5%
歯	1.9%	3.3%	5.5%	7.8%	83.9%	64.8%
薬	0.0%	2.4%	3.4%	9.0%	90.0%	73.9%
看護・医療	0.0%	1.9%	2.1%	7.3%	92.0%	83.1%
家政	0.0%	1.5%	1.6%	6.0%	93.3%	89.9%
芸術・体育	1.0%	2.7%	3.1%	10.5%	85.3%	82.7%

※表中、文中の数値は全て中央値。１年以内退学率＝国公立大学149校599学部、私立大学451校1,339学部、修業年限以内退学率＝国公立大学147校600学部、私立大学442校1,266学部、修業年限卒業率＝国公立大学147大学597学部、私立大学440大学1,254学部の有効回答を基に算出。学部はいずれもコース等含む。

大学生の本分は学問だ。教養を身につけるとともに学問探究を重ね、知的な意味で成長することは大切だ。しかし、大学生活はそれだけではない。新しい仲間との出会い、サークル活動、学外でのアルバイトなども大学生活を彩るファクターだ。厳しい受験生活を乗り越えて入学したからには、大学生活を有意義なものとして過ごし、人間として成長した上で社会に巣立っていってもらいたいと誰もが願っている。

一方で、現実もある。「友だちができない」などと人間関係に悩んだり、「学びたい学問はこの学問ではなかった」といったアンマッチがあったりもする。こうした悩みを持つ新入生に対して大学は、友だち作りのサポートや、勉強法のレクチャーなどさまざまな取り組みをしている。しかし、実際には、入学後１年以内に大学を退学する者、卒業することなく退学する者がいるのも事実だ。

ここでは、現状を知るためにデータを示していきたい。まず全体値。総じて国公立大学は退学率（１年以内、修業年限以内とも）が低く、修業年限卒業率は高い。卒業後の進路状況でも同様だが、私立大学は大学の数が多く、学部・学科もバラエティ豊かだ。結果、その在籍学生も多種多様であることが、各数値の背景にあると考えられる。なお、退学率に関する集計データの最頻出の値は、国公私立大学ともに０％だった。昨年の同調査でも、１年以内退学率は国公立大学0.5%、私立大学2.0%、修業年限以内退学率は国公立大学2.7%、私立大学8.1%、修業年限卒業率は国公立大学85.2%、私立大学80.2%と、数値は同傾向だ。

次に、系統別の数値は、医・歯・薬系統に着目したい。各々、難関国家試験を経て、医療従事者として責任ある職種を目指す学部だ。学ぶ内容は濃く、単位認定も厳格だ。修業年限で卒業することは容易ではないことを、数値は示している。

©2013 旺文社 教育情報センター

９．大学卒業後の進路

【国立大学の進学率の高さが顕著！ 総じて、公立大学は就職率が高い！】

[エリア別]
進学者を除いた卒業生のうち就職者の割合

	国立大学	公立大学	私立大学
北海道・東北	83.5%	92.0%	77.2%
関東	80.3%	86.7%	75.9%
中部	86.5%	86.7%	82.9%
近畿	84.0%	84.7%	76.4%
中国・四国	84.1%	86.6%	80.4%
九州	79.0%	78.5%	74.8%

※国立大学81校412学部、公立大学77校180学部、私立大学528校1,491学部の有効回答を基に算出。学部はいずれもコース等含む。就職者は「正規職員等」「非正規職員等」の合計。医学科、歯学科は除いている。

大学・学部選びに際して、卒業後の進路を気にかける受験生や保護者は多い。実際、大学志願者の動向を見てみても、就職に有利と考えられている理系学部、資格が取れる学部の人気は、ここ数年継続して高い。

たしかに、経済状況の悪化による大学生の内定取り消し問題や就職難が社会問題化したことを考えると、そうしたマインドも、当然のことと言える。リーマン・ショック後の、2010年～2011年の超就職難の状況に比較すれば、やや持ち直してきたとはいえ、日本経済の劇的な好転が見通せない限り、受験生と保護者にとって将来不安は切実な問題だ。

グラフを見てわかる通り、大学生の卒業後の進路は、国立・公立・私立の各々で特徴的だ。全体としては、国立大学は大学院などへの進学者の割合が高い。逆に私立大学では進学者の割合は低い。公立大学はその中間といった状況だ。

系統別に見ると、国公私立大学ともに、理・工・農学系学部の進学率は高い。進学率50％以上の国立大学42校92学部のうち、79学部が理・工・農学系で、東北大学、東京大学、東京工業大学、京都大学、大阪大学、九州大学など研究拠点大学が名を連ねる。公立大学でも同様に、６大学12学部のうち、10学部が理・工・農学系だ。私立大学でも、16大学23学部のうち14学部を占める。

各学問分野のクロスオーバーや、学問内容の高度化などによって、具体的な研究が学部レベルではなく、大学院に移行していることが背景にあるためだろう。ちなみに、理・工・農学系に次いで進学率が高いのは４年制の薬学科だ。

次に、就職者の割合について見ていこう。就職率には、さまざまな算出方法がある。「卒業者に占める就職者の割合」「就職希望者のうち就職できた者の割合」などだ。ここでは、実態を客観的に表すと考えられる数値を、エリア別に示した。算出式は「就職者÷（卒業者−進学者）」だ。この計算式で算出した就職率は、全体値では公立大学がもっとも高く、次いで国立大学、私立大学と続く。

公立大学には、看護・医療系の大学が少なくない。この系統の就職率は総じて高いため、全体の数値を押し上げたと見ることができる。一方、私立大学は、大学・学部数が多いため設置されている学部系統もさまざまだ。そのため、進路も多種多様となり、たとえば、芸術系学部をはじめとして、卒業後にフリーランス活動をはじめるケースも少なくない。

以上、マクロ的な分析によって全体傾向を示したが、大学卒業後の進路状況については、国公私立大学ともに、大学・学部・学科によってさまざまだ。全体傾向を把握した上で、個別大学の状況については個々に調べてみてほしい。

©2013 旺文社 教育情報センター